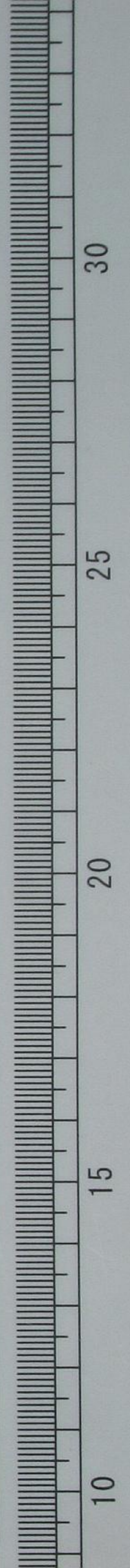


柳田文庫
文庫11
A1555



文庫 11
A/555

小學讀本卷之二

第一

此女兒ハ人形を持て
り。○汝も人形を好む
久。○我も甚こを好
り。○此男兒も人形
を持てりや。○否、男兒
ハ人形を持てんて



柳田泉文庫

田中義廉 編輯

那珂通高 訂正

田中義廉

小學讀本

卷之二

第一

鞭と持てり男兒の遊ハ、女兒と異ふまじなり、
 老たる牝雞、鶩の子と多く伴へり、○此鶩の子ハ



皆水の中ハ、飛入るなり、○此鳥ハ、
 其性、水上ハ泳ぐことと好めり、
 ○牝雞ハ、其沈み溺むんことを
 恐きて、甚憂ひ悲めり、○然れど
 も、鶩の子ハ、牝雞の心と、量り知
 らざりて、隨意ニ遊べり、○牝雞
 ハ、何と憂ひ悲むし、思ふや、○牝
 雞ハ、此鶩の心ハ、鳥あるを、知ら

ば、我子と思ひ、悲あるなり、
 爰ニ成長したる鶩あり、○鶩の
 嘴ハ、牝雞の嘴より大なり、其
 足ハ、蹠あり、故ニ、水ニ入りて、能
 く泳ぐことと、得るあり、



此ハ、何家あると、知まじりや、○これハ、學校あるべ
 し、數多の男女の子、此家ニ通ふを以て、知らざり
 り、○汝ハ、小兒の遊歩場ニ、出で、遊ぶと、見たる
 や、○數多の小兒、出で、走るも、あり、球と弄ぶも
 あり、或ハ、紙鳶と揚げ、或ハ、輪と廻し、遊ば

〇男兜も、女兜も、學校
 までハ、能く勉強したる、
 一〇能く勉強したる、
 後ハ非きバ、遊歩と由
 るさるとも、誠ニ、樂き
 ことハ、おきものあり、
 今此子の、釣りたる魚
 ハ、鯉あり、〇汝も、魚と
 釣り得たるときハ、能く心を用ひよ、釣糸を切ら
 ることあるべし、〇天曇りて、雨少しく、降り来

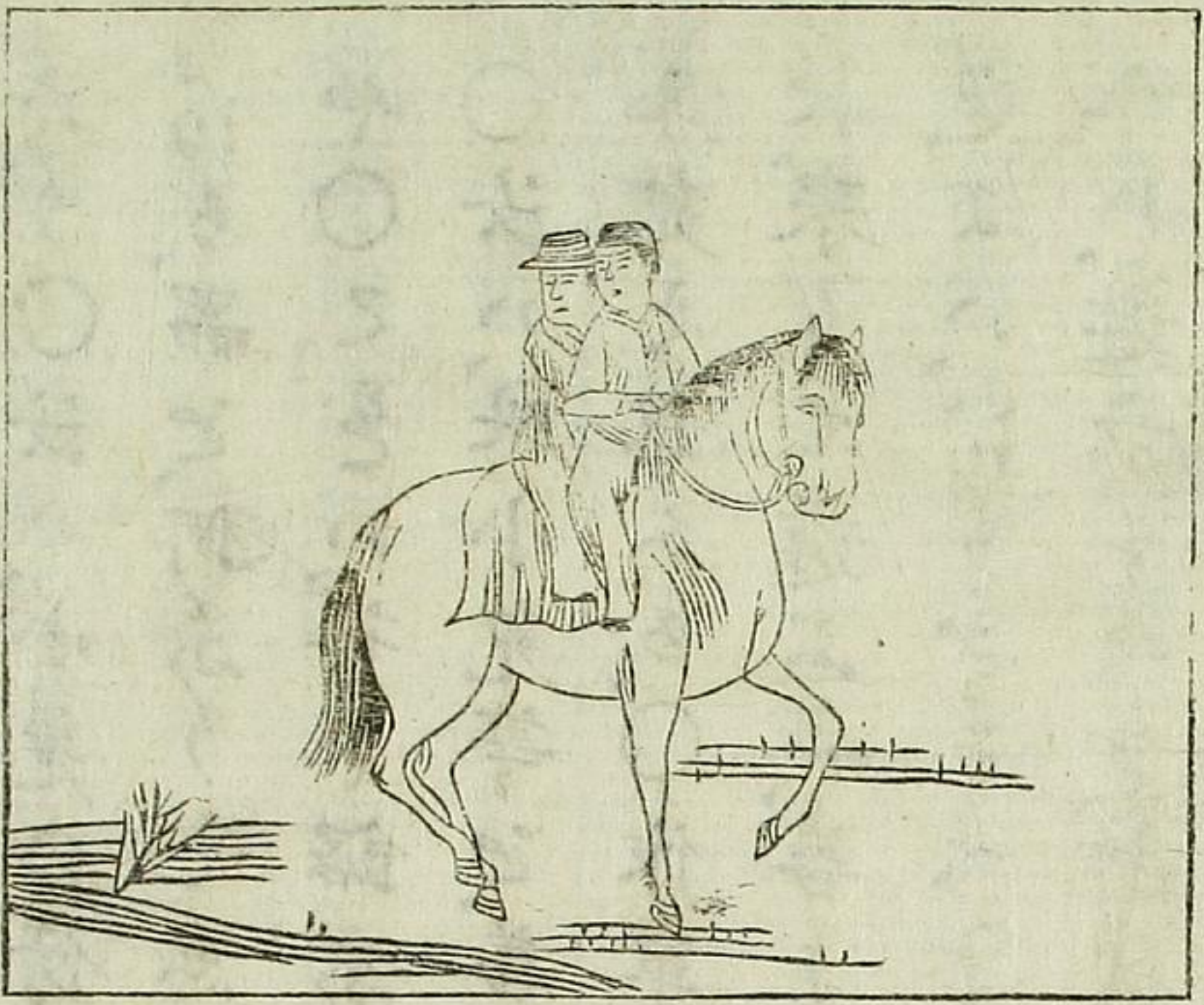


きり、〇魚を釣るよハ、雨天の
 ときと、宜しとせらる。〇然り、
 少しく雨降りて、風おく、暖か
 る日と宜しとせらる。〇汝ハ、魚を
 釣ると、以て、宜しき事と思ふ
 〇然り、魚を釣りて、食せら
 ハ、悪しき事又ありばと、雖釣
 りたる魚と、弄びて、徒ら捨つ

るハ、宜しき事、
 男兜と、女兜とあり、〇これハ、學校へ行く途中

り○今急きて、學校は行らん
と思ふらゆゑ、男兒ハ、女兒
を助けて、走らり○此兒等ハ、
學校は行くと、樂と思へりや
○然り、此兒等ハ、其性善きむ
の未きバ、學校は行きて、學問
することと、第一の樂と思ふなり

此馬ハ、柔和なる馬ゆゑ、二人の小兒を、乗せて歩
り○此馬を、走ると、思ふら○此馬ハ、前の一足
を、擧げて、あとの一足を、下さんとするを、見れば、



走らばハ、何れに、徐に歩
むあり○前の小兒ハ、手
綱を、両手は持ちたきと
も、其見ゆらハ、只右の手
のみあり○後の小兒ハ、
馬より、落つることと、恐
ろしゆゑ、前の小兒を、
抱きて、せきり、

此處ハ、工人の作事場あり○數多の大人ハ、作事
と事とせり○二人の小兒ハ、此作事場より、来り、板

又來りて、遊び戯を居きり、一人の小兒ハ、高く上
 がり、一人ハ、低く下あり
 たり○汝ハ、小兒の傍に
 あり、器を、何ありと思ふ
 や○こそハ、斧と鋸あり
 ○汝ハ、此小兒等と、善き
 小兒と思ふら、○作事場
 に、來りて遊ぶハ、善き小
 兒ハ、何らざるべし○
 今ハ、遊歩をくき、時間と

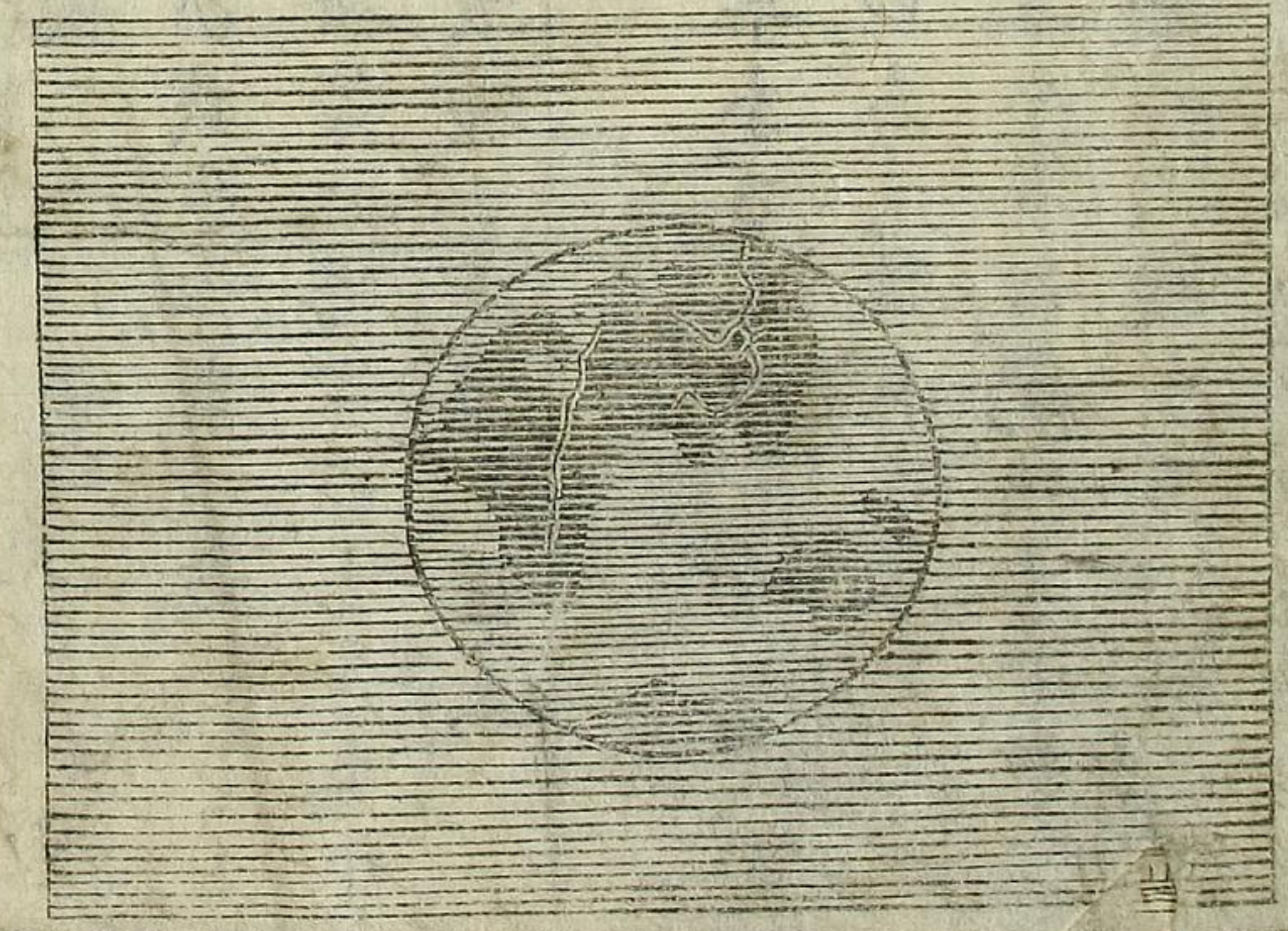


ハ見え、學問をくき、時間あり、○學問をくき、時
 間に、作事場は、來りて、遊び戯を、作事の妨をくさ
 ハ、必らず、き小兒なり、○汝等ハ、遊歩のときも、作
 事場は、來るべし、のうに、遊歩場まで遊ぶ事、

第二

我等の、住居する世界ハ、平なるものなり、ゆえに、實
 ハ圓くして、球の如きものあり、故に世界と地球
 との、○此世界ハ、靜あるやうに、覺ゆをくさ、實
 ハ動くものにて、毎日一廻づ、旋りて一年、
 太陽の周りと、一旋りするものあり、○太陽ハ、圓

きものりて、世界は光と、
熱とを與ふるものあり
○我等晝は、太陽を見ま
ども、夜は、見ることなし
○汝、夜の、太陽と見ること
とを得ざるは、何ゆゑか
るとを知らずや、○夜は、太
陽の方へ、向をざるゆゑ
に、見ることを得ざるか
り○月も、亦圓きものか



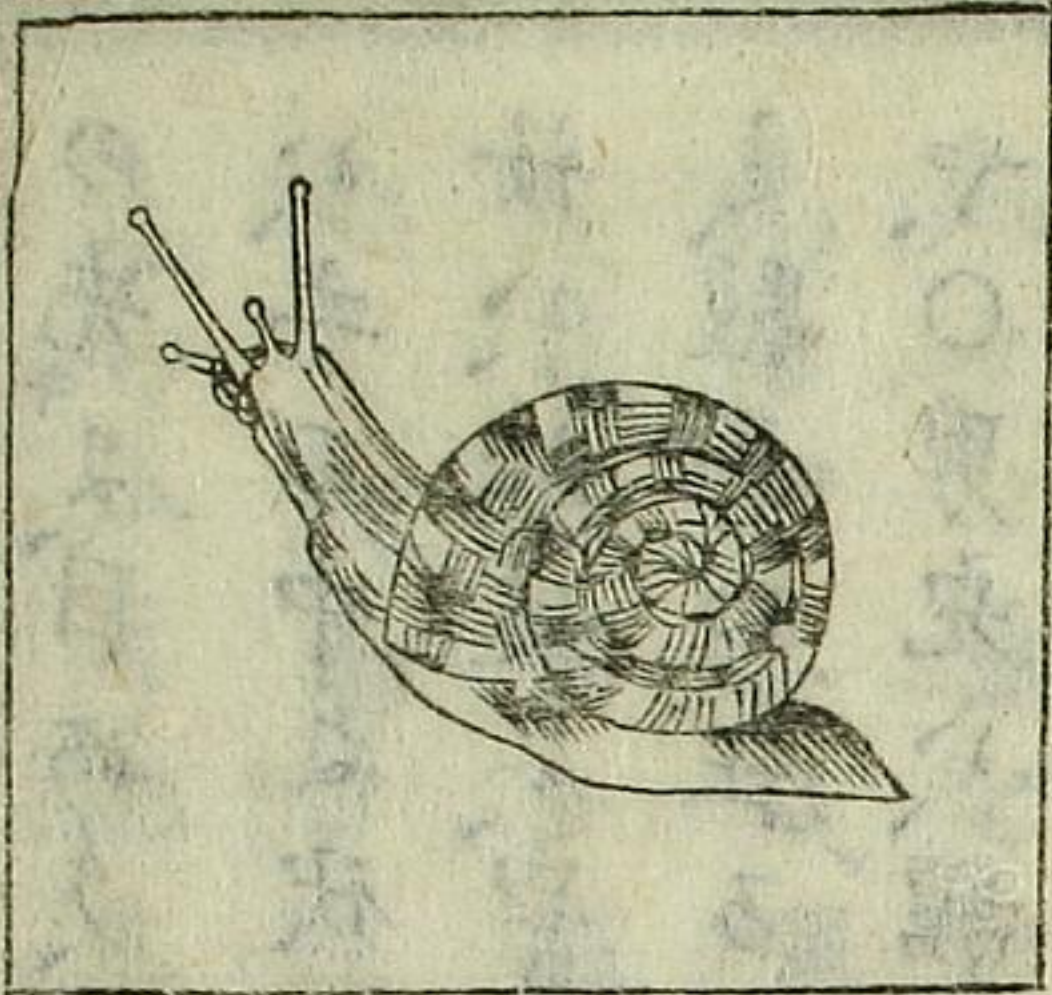
きども、太陽及地球の如く、大あり、○月、原
より、光なきものなきども、太陽の光と、受けて、始
めて輝くものあり、
我等一同は、草刈場へ、出
来たり、○小兒は、刈りた
る草の上へ、坐し居て、草
と刈りと觀る、○枯草は、
柔なる物なきは、此上へ、
遊び戯るゝは、宜しきか
り、○草は、牛馬の食あり



ゆるふ、牛馬と畜ふ家にてハ、夏の間又刈りてと
きと野ふ

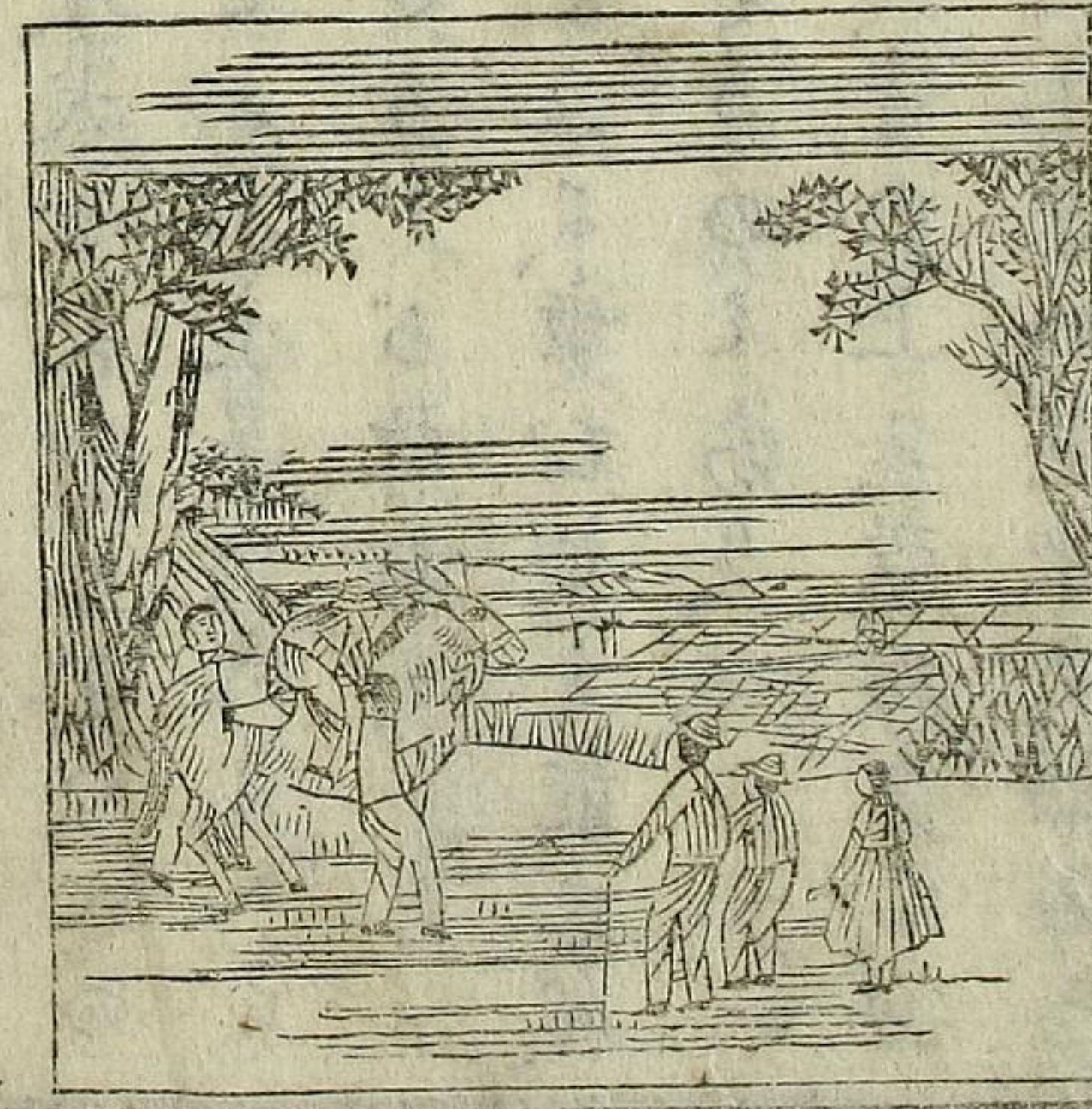


狐ハ、犬に似たる獸にして、
頭平又、鼻と耳とハ、尖りて、
尾ハ甚長し。○此獸ハ、穴の
中よ住し、晝ハ隠きて、出で
ば、夜よ入る穴より出で
て、田畠の傍と、遊行ハ、○狐
ハ、食と貪る獸にして、多く
雞の雛を食ひ、又好く、桑



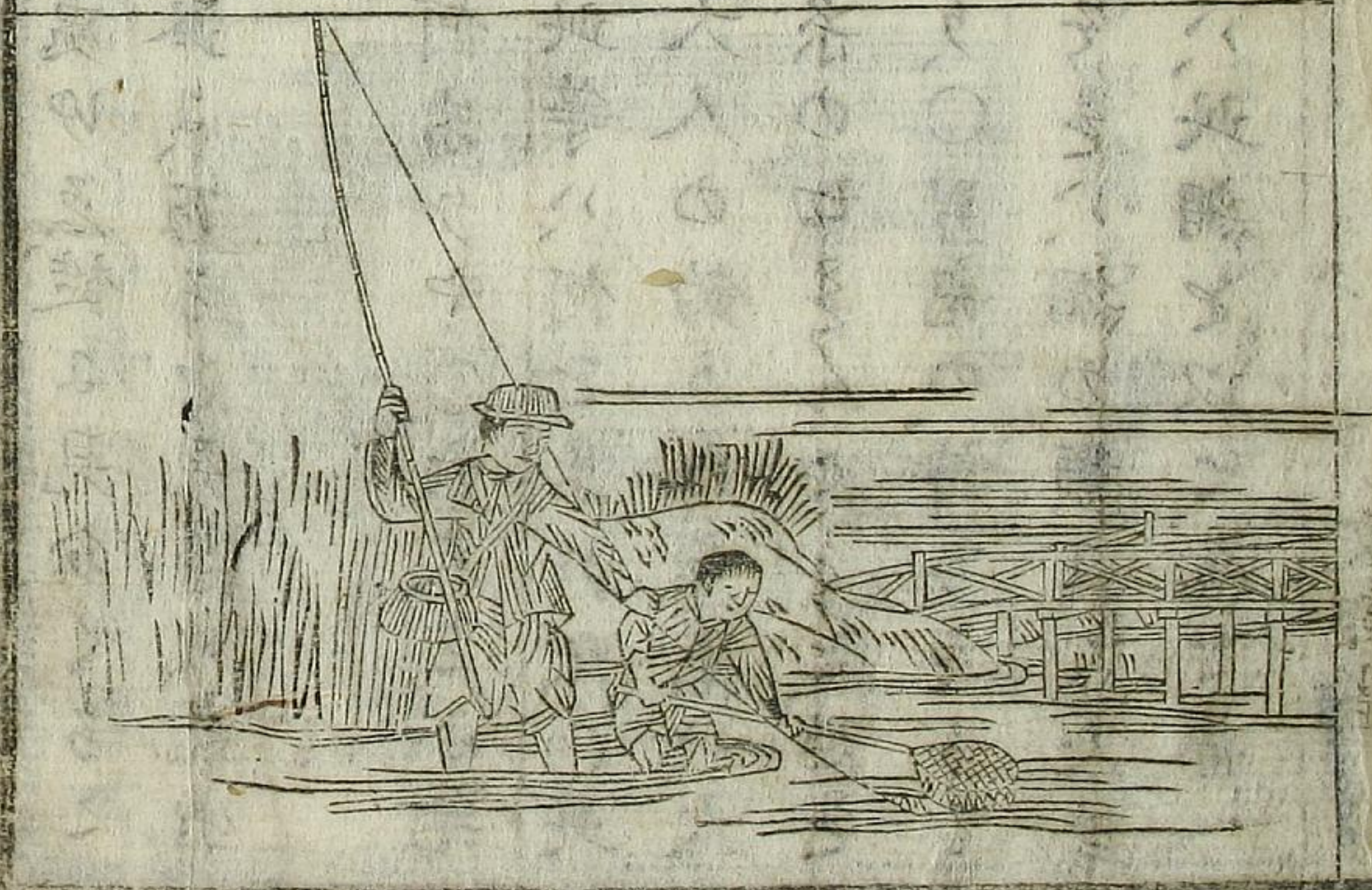
の實、櫻の實等と食ふ。○雞を捕ふと、穴を掘り
行きて、こゝを食ふ。○も、犬を見るときハ、穴の
中よ、逃げ入りて、出づることふし、是ハ、穴よ入ら
ざれば、直り、犬の噛み殺さる。○故あり。
蝸牛といハ、蟲ハ、足なきゆるふ、歩むこと能く、
只匍匐するのこあり。
この蟲ハ、背の上よ、殻ありて、物
よ恐るるときハ、其中よ縮み入
る。○蝸牛の、動くときハ、四本の
角と出づらん、其中、二本の長き角

の先^キ又、目^メあり、短^ミき角^{カク}の下^ノ、口^{クチ}あり、○此^{コノ}蟲^{ムシ}ハ、冬^{フユ}ハ、土^{ツチ}の中^ノに伏^カし、春^{ハル}の至^キると待^マちて、出^デづるなり、
 汝^ニハ、此^{コノ}處^{トコロ}に、男^{オトコ}免^メと、女^メ免^メと、
 驢^{ウマ}馬^バの在^アると見^ミたり
 や、○男^{オトコ}免^メハ、驢^{ウマ}馬^バに乘^ノり
 んしん、○何^{ナニ}如^ニ、汝^ニを、乘^ノ
 り易^{ヨク}がるべしと思^{オモ}ふら、
 ○驢^{ウマ}馬^バハ、小^コさき馬^{ウマ}あれ
 ども、小^コ免^メハ、乘^ノり難^{ガタ}い
 るべし、○遙^{トホ}に向^ムひし荷^カ車^{クルマ}あり、○汝^ニハ、此^{コノ}荷^カ車^{クルマ}を、



何^{ナニ}ありと思^{オモ}ふや、○遠^{トホ}き處^{トコロ}ゆ急^{イサ}、徒^タに見^ミ分^ワくると
 と、能^スくそれとも、畜^{チク}の小路^{コミチ}に、あると見^ミるは、穀^{コク}物^{モノ}
 を載^ノせたる車^{クルマ}あるべし、
 此^{コノ}圖^ズに、画^エきたるものハ、何^{ナニ}ありや、○大^{オホ}人^{ヒト}と、小^コ免^メ
 と、二人^{ニヒト}水中^{スイチュウ}に立^タてり、○此^{コノ}等^{トウ}ハ、何^{ナニ}を求^{モト}めたりや、○此^{コノ}
 人^{ヒト}々^々ハ、魚^{イサ}を漁^{イサヲ}するなり、大^{オホ}人^{ヒト}の釣^{ツリ}りたる魚^{イサ}ハ、大^{オホ}
 あるゆゑ、又^{マタ}、強^{ツヨク}く曳^ヒあは、糸^{イト}の切^キるんことを、恐^{オソ}そ
 て、遠^{トホ}く、曳^ヒき擧^トげざるあり、○男^{オトコ}免^メの、持^テちたるも
 のを、何^{ナニ}ありと思^{オモ}ふや、○そを、ハ、網^{アミ}の類^{ルイ}とて、たま
 とひしものあり、○男^{オトコ}免^メハ、此^{コノ}網^{アミ}を以^モて、魚^{イサ}を捕^ツへ

んといふ。○大人の脇に懸
けたるは、何なるぞ。○こ
きい、蓋の鉤を籠りて、其
中へ魚を入りてあり。○
此人の立ちたる處は、深
しと思ふ。○人の膝ま
で、水又入らざるぞ、見え
ば、甚深なり。然れども、深水
ありて、二人とも立ちこ
え、能くざるべし。○此河



よ、架したる橋あり。汝は、此橋は、何ぞて造りたる
と思ふぞ。○橋は、木と石と、鐵との別は、何なる
も、こそは、木にて造りたる橋なり。
汝は、此男兒と、何歳許な
りと思ふや。○此男兒は、
十歳以上あり。○此男兒
は、善き人ありと、思ふ。
○否、學問をもせざ、又遊
歩ともなまらざりて、休み
とるゆゑに、怠りものと、



知らるるあり○此男児ハ何と寄りて何と見る
 や○此男児の寄りたるものハ大なる石の柱な
 り又此男児ハ何と見れば只天を遊ぶのむるあり
 ○總て小児ハ勉むべき時もあり遊ぶべき時
 もあり○此小児の如く常に勉強をなさざるこ
 ころハ成長の後人々勝ることと得ざるあり
 爰に又怠惰の小児あり○彼ハ學校へ行くと云
 ひしに何ゆゑハ學校へ行かざりて途中に遊
 び居るや○未だ學校へ行かざりて時刻來らばや○
 學校よりハ既に誓古始まつたをば此小児もと

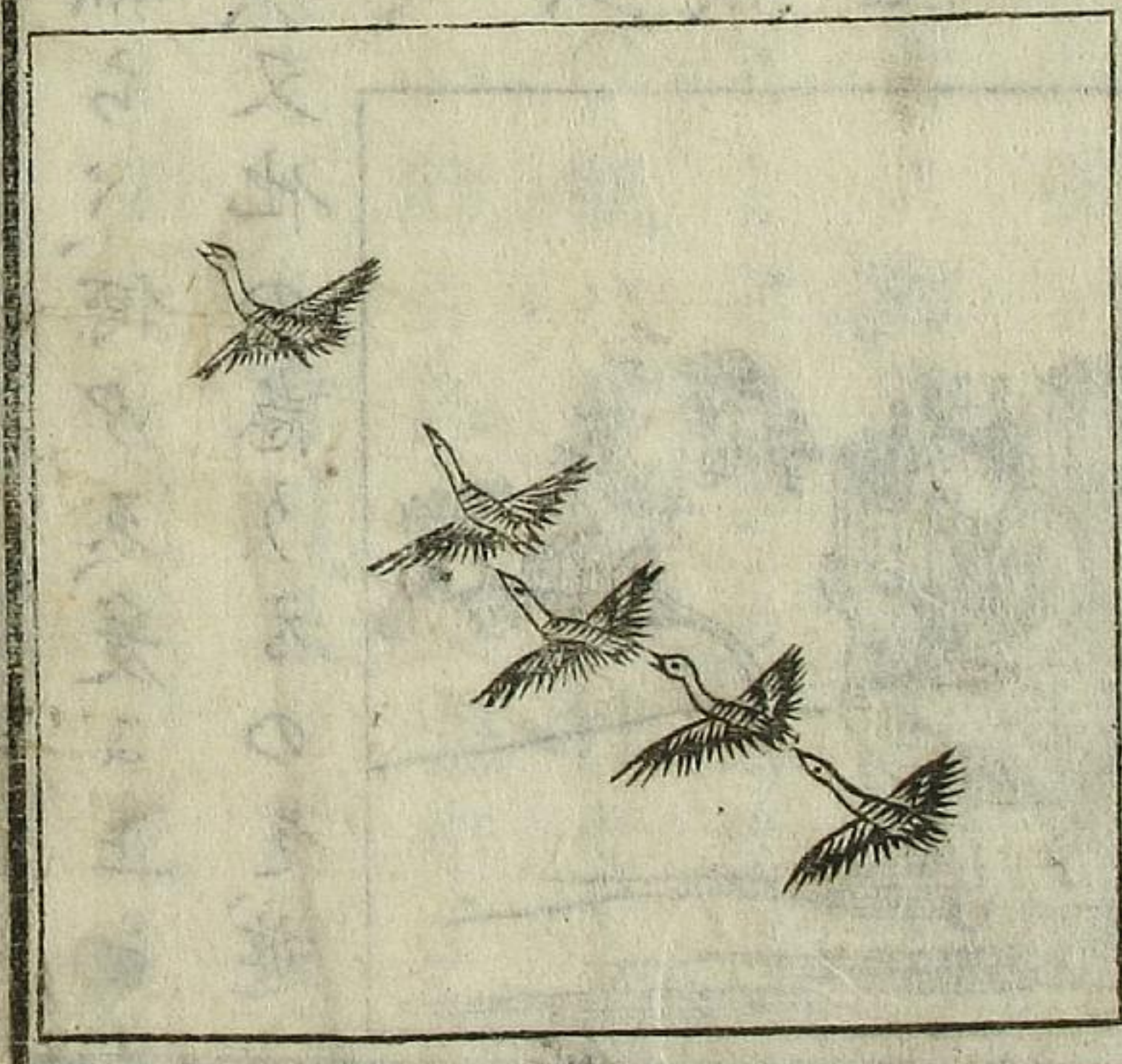
く行くべき時刻あり○然らば何ゆゑ爰に止ま
 り居るや○彼ハ犬を乗り又他の怠りものと遊
 さんと思へばあり○彼ハ
 學校に行くものありば其
 書とバ何處に置きたるや
 ○書とバ自分の家と怠を
 たるあり○さきバ學校に
 行きたりとも誓古するこ
 とと得ば○善き小児ハ書
 と大切と承りて學校に行



くど好み、誓古の時間来を、決して、途中より、遊
 び居ることあり、學校よりても、能く勉強して、學ぶ
 ゆゑ、其等級、屢進むあり、

第三

雁の列をなして、行く圖
 あり、○見るに、一羽の
 雁、導をなせば、其他の雁
 は、これを隨ひて、飛行く
 と○是を、何處は行くや、
 ○或は、水邊は行き、葦



の間は息み、或は田より下りて、食物を求めんとす
 るあり
 此鳥は、冬は北より南に來り、春は至るに、又南よ
 り北に歸る、故に夏は此地に居ることあり、其地
 には生ひ出づる物は、草と
 木とありて、木は、灌木と、喬
 木とあり、○草は、其幹葉一
 年限りて、枯るものあり、
 灌木は、高一丈より出で、
 雖、其幹は、枯るものあり、

あり○喬木といハ成長して、高大に至るものと云ふ○此三の者を合せて、植物と云ふ、植物ハ生を保ちて、能く成長し又死してハ枯朽するものなきとも、人の如くは、物を思ふ、根ハ食物と、地下より吸ひ、葉ハ能く呼吸されとも、鳥獸の如く、動くことある、



鳥ハ二つの足と、二つの翼ありて、多くハ空中に翔る、又水上に住むものもあり○獸類ハ四足は長き毛は

り○此鳥と獸といハ、身體を、意は従ひて、動くせども、人の如く、言ふこと能く、汝ハ、實のる草木の、種類を知りや、○其莢を見て、豌豆と、蠶豆とを知り、穂の形を見て、稻と、麥とを知り、草木といハ、皆種子あり、豌豆、蠶豆ハ、莢の中は在りて、梨、李、橙ハ、肉の中は在り、○種子の、食物とあるものハ、稻、麥、豆、黍、粟の類なり、肉の、食



物とあるものハ、梅、桃、梨、蜜柑の類なり、
 草木ハ、皆種子より生じ、濕ひたる土の中ニ、種子
 を置くときハ、漸ニ膨脹して、遂ニ破裂し、其所よ
 り、芽と根とを生じらるあり、
 鹿ハ、山林ニ、住する獸なり、
 この獸の牡ハ、枝を生ト
 たる角あり、牝ハ、角なし、
 其色ハ、茶褐色にして、白き
 斑あり、
 鹿ハ、長き足ありて、走るこ



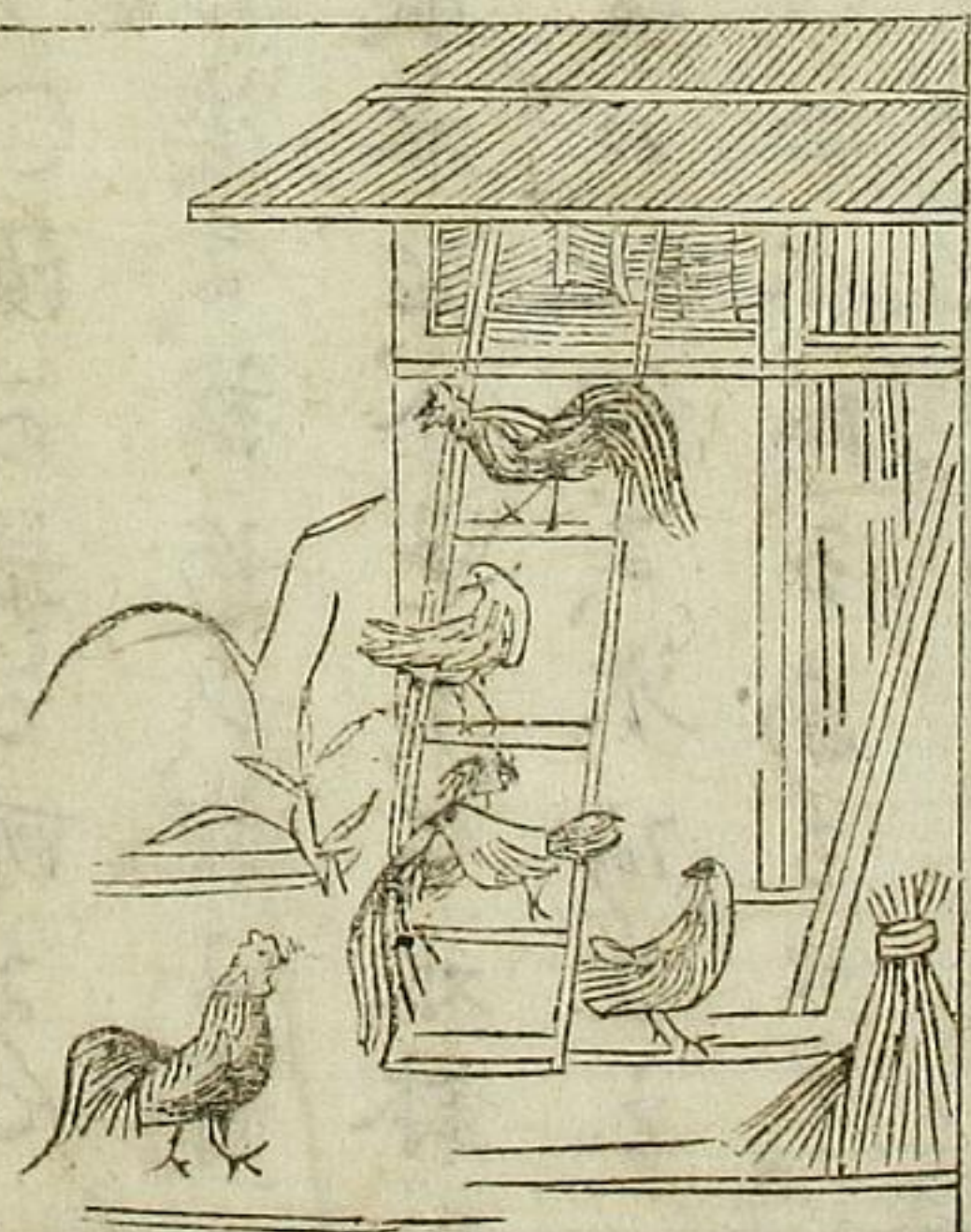
と、甚速あり、○常ニ、草木の葉を食とし、或ハ、田野
 に来りて、穀物を食することあり、此獸の角ハ、堅
 くして、器に造るべく、又其皮ハ、席とあらへし、
 此男兎ハ、惡しき心のものであり、汝ハ、この男兎の
 持つる帽の中にある物と、見たるか、○これハ、柿
 の實あり、○此柿の實と垣と踏え、隣家より、盗
 り取らるあり、○今此男兎、柿の實を、盗り取り、垣
 を踏え、出てんとする所を、數多の犬とも、それ
 を見て、男兎を追ひつけ、一匹の犬、男兎の裾を咬
 へたり、よりて、男兎ハ、垣を踏え去ることを得ば、

此時、盗みたる柿の實と、捨ておバ、犬ハ、裾を放つべけきども、此男兜ハ、これを捨つること能はぬ。○他人の物と盗むハ、決して、為すまじきことなり、善き小兜ハ、自分の物なかりざれば、取ることなり。○常ニ、行狀の正しきものハ、幸多く、正し、うらざるものハ、幸を得ること能はさきバ、汝等、他人のものを見て、何如あるものありとも、必これを得んことを、欲せらることもふかたし。



爰又、四箇の雞と、穀倉とあり。○汝ガ、見る所にてハ、これのとありや。○否、家の後ニ、松あり、垣ニ寄せて、立てたる簾あり、雞の飲水と、入きたる水鉢あり。○汝ハ、此鉢ニ、水ありと思ふや。○必水あるありべし。○何を以て、水のありを知とる。○此鉢ニ、少し傾きて、一邊の縁、高く出でたるを以て、水のありを知り、水ハ、傾きたる鉢の中より、決りて、斜

傾くことなく、其表面ハ、必一様ニ平なるものなり、○汝ハ雞の水と飲むと、見一や、雞ハ、牛馬の如く、首を下げて、飲むこと能くば、ゆゑニ一滴口に入ると、首を擧げて、咽ふ、飲み下だすあり、此處ハ、何如ある所ありや、○此處ハ、穀倉の傍あるべし、雞ハ、巢に上らんとして、梯子と傳ひ行くあり、○梯子に、横木あり、ここハ何ありや、此横木ハ、梯子の級あり、



汝ハ、雞の巢と見たるか、○巢ハ、隠さく、樞の裏にあるゆゑ、見ることを得ば、

汝、此處ニ来よ、汝昨日、夫ひたる所の、書籍を、尋ね得たりや、○否、未、尋ね得ば、○汝ハ、文庫の中と、捜し見ば、○幾度も、捜し見たるども、其處は、あり、○汝、今一度、尋ね見よ、書籍あけよ、學ぶこと能えば、

又、汝は、筆ありや、○筆ハ、命ぜりをたる如く、文庫の上は、置きたり、○汝ハ、筆の用ゐると、知せりや、○否、未、用ゐるかたと知らば、○汝、今其筆を取来

是、汝も、筆の用ゐ方と、教ふべし筆の用ゐかよと、
 知らざれば、字と習ふこと能はるべし、
 汝ハ、今日、學校へ行きたりや、
 ○學校へ行きて、終日學びて、先
 刻、歸り来きり、○然らば、座
 就きて、復讀せよ、凡て、學びた
 る所とバ、常は、復讀して、決
 て、忘るべからず、

第四

岸の上は、二人の少年あり、三艘の船の岸に着



くと、見居きり、○三艘共は、帆と、十分は張りて、橋
 の上は、旗と、揚げたる船な
 り、
 一人の少年云ふ、我ガ朋友
 ハ、去年、先きの船に乗りて、外
 國へ、往きたりしが、日を數
 ふと、其出立せし日より、
 今日まで、殆一年は及びて、
 歸り来きり、
 彼の両親を、日々、彼の歸る



と待てり。○今日、無事ある顔と見ることを得て、
何^カ許^カの喜^バしうらん、また彼男も、父母の恙なき、
顔を見^バ、定めて、大に喜ぶべし。
彼船ハ、堅固ある船にて、風雨は逢ふとも、破損亦
く、無難に、歸り来さば、船中の人々ハ、皆此船と、忝
く思ふあるべし。

人々の外國は行くハ、學問或ハ、貿易を志して、我
國の、利益をおさんことを、欲するがゆゑあり、
總て鳥も、嘴の長きものと、短きものとあり。○此
嘴にて、食物を啄む。○鳥は、穀物を食するもの

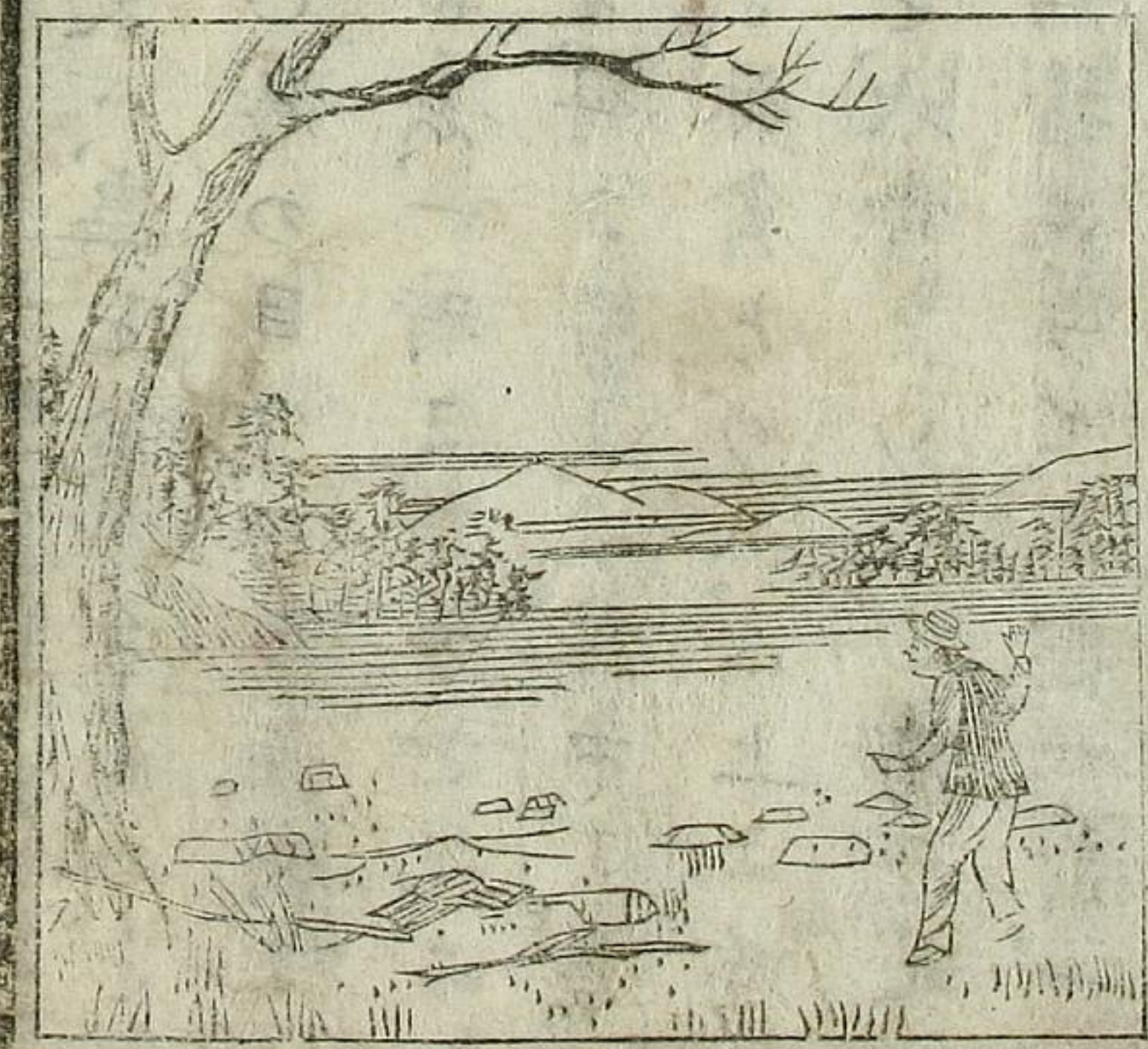


と、魚又ハ、蟲を食するものと
あり。○鳥の目ハ、面の両側は
ありゆゑ、一時は兩方を見ら
ることと、得るあり。○林中は遊
ぶ鳥と、林禽と、ソハ、水上は遊
ぶ鳥と、水禽と、ソハ、○鳥の足
は、四指ありて、三指ハ、前、一
指ハ、後、一あり、然るとも、啄木鳥類も、前後各二指
ありて、能く大木に上下し、樹皮の中は住む蟲と、
搜し食す。

此人ハ驚きたる風情あり、是ハ何故ありや、○何故あることを知らば、○此人ハ、久しき以前より遠方より行きて、今我郷に歸り來るに、昔住みたりし家の變りたるを見て、驚けるあり。

さて、此家の、斯く變りたる所以と、話し聞かば、

此人の、家を出でたる後、近隣より一人の小兒あり



此小兒ハ、至りて、惡しきものば、ある日、紙を焼きて、遊べるに、其火、忽家の障子は燃えつき、終に此家まで、焼け失せたり。○是をば、今此人、我家に歸り來りても、未、妻子の行きたる所を、も、知ること能はず、嗚呼、悲み歎くあり。今此人の家の、焼けたる時の状と、圖して示さん。○火と、烟との家の窓より、吹出づる所を見よ。○又、家は懸けたる、梯子あり、○梯子より上りて、火を消さんと、も、人あり、○多くの人々、唧筒を、頻りに水と注げり。



此圖は、画きたると、柔和なる牛を、此小兒は

然きども、火猶消之、
 家終に、焼け落ちたる、
 この家の人々も、皆逃げ去
 せるあり、
 さきバ、小兒ハ、火を弄ぶべ
 り、一度過つ時ハ、家と
 も、倉とも失ひ、甚しき、至
 りてハ、其身とも失ふこと、
 ありものあり、



隨ひ、徐に歩めり、此小兒ハ、今牧場ニ、牛と曳き行
 く所あり、○此小兒ハ、何ゆゑニ、歩みあはら、書と
 讀むや、此小兒ハ、其性極めて賢く、常に學問を好

むことと好めども、家貧しき
 ゆゑニ、學校に入ること能
 はず、日々牧場を行
 あり、然きども、學問の志、深
 きに因りて、道と行く間も、
 書を讀むあり、又牧場に至
 りてハ、休む間ハ、書と見ど

ることおし、○此の如き小兒ハ、他日、必人よまされりて、貴き人とあるべし、
 惡しき小兒ハ、日々、學校日行くと雖、能く勉強せざりて、遊ぶことのことと、好むゆゑ、後ハ愚ある者とありて、貧賤又、其身を終るべし、
 雲雀、巢と、麥島の間、造りて、雛と育てたり、○麥ハ、己ハ熟し、刈るべき時、又至りたるハ、雛ハ未自由、飛ぶこと能はず、一日、親鳥、食と求めんとて、飛び去り、暮ハ及びて、歸り来むバ、雛告げて、令親、此、富主ある農夫、其子も共、来りて、明日ハ近

隣の人と雇ひて、此、麥と刈り取らんとして、歸せりと云ふ、親鳥聞きて、彼、近隣の人と雇はんとして、未、急よハ、刈取るべし、のらば、明日ハ、此處にありとも、恐ろし、足らばとりひ、其翌日も、亦食と求めんとて、飛び去りたり、かくて、日の暮る、此、親鳥歸り来むバ、雛又告げて、今日も、農夫、其子と共、来りし、近隣の人も、同ト



學讀本 卷三 二十 文部省

く、己が作りたる、麥を刈るに、暇あらざれば、明日ハ、朋友、親族を頼らるゝ、刈り取らんとて、歸せりと云ふ、親鳥ハ、彼尚他人を頼むの、心あらば、明日も憂ふるは、足らざると、云へり

さて其翌日、親鳥例の如く、飛去りて、歸り来るよ、雛の云ふ、今日ハ、農夫父子来りて、かく麥の熟せり、早くハ、最早、他人の力を待つか暇あらざれば、明日ハ、自刈り取るべしとて、歸せりと云へり

親鳥ハ、ことを聞きて、然らば我等も、疾く此處を立ち去るべし、農夫が、自刈り取らんと、決したるうへハ、必日を延かたべし、いへりとて、

親鳥の言、實は理あり、他人を依りて、事を成さんとせざる者ハ、恐るゝは、足らざれども、自為さんと決せし時ハ、須臾も、猶豫せざる、べけは、あり、をば、人々、皆自為さんと、志して、他人の力をバ、頼むべし、いへり

第五

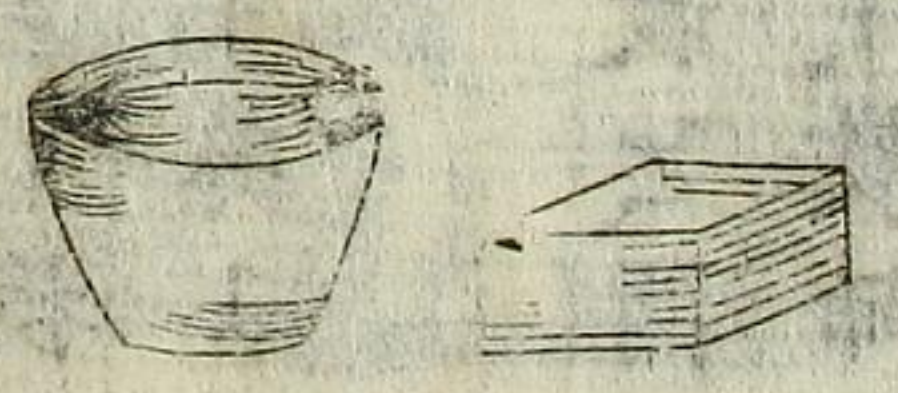
今、花園に、善き種子を蒔きて、善き植物を、生ぜしめ、美しき花を、開かんとせると、園中も、蔓さる雑草を、抜き取りざるときハ、蒔きたる種子を、

害して、生長すること、能さざらむ。
 今、此處は、花園の、雑草を、抜き去る圖と、出だして
 以て、これと示さん、
 地は、もとよきものあはれど
 も、善き種子と、蒔のざれば、
 よき植物を生じ、美しき花
 を開くこと能はん、又芽既
 り萌出でたるるときは、能く
 培養せざれば、生長は、こ
 と能はん、雑草は、これを反

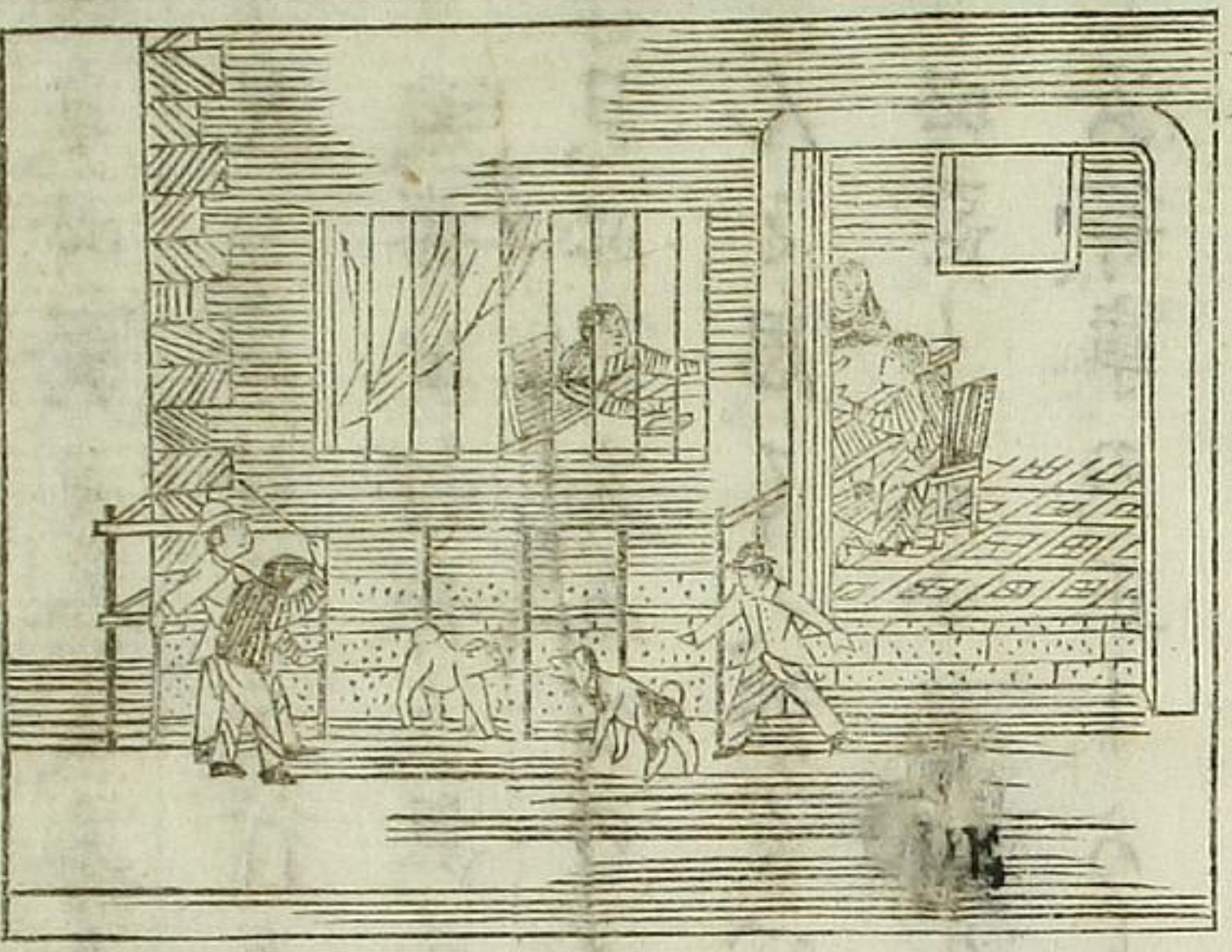


して、種子と蒔らざれば、自生長し、これを抜き
 去らざれば、大に蔓りて、善き植物を害し、終つて
 枯らして盡はるに至るべし、
 人の心は、もと、善きものあはれども、善き教を、聞き
 て、これを従てざれば、善き人と、成り難し、教師の
 教は、即、我心は、種子と蒔くは、同し、故に、心を用ひ
 て、これを育み、能く成長せしむべし、然るに、心は、不
 正の心の、生じ易きこと、雑草の如くあはれば、心は
 蒔きたる、善き種子と、害するものも、勉めて、こ
 を抜き去らば、あるべし、

き去ることと、怠りて、成長せしむるときは、終は
 中又萌せる、良心を害して、ことを枯らし盡は
 又至るべし、
 汝等、善き人と、あらんことを欲せば、此人の、雑草
 を抜き去るが如く、勉めて、不正の心を、抜き去る
 べし、
 爰に、圓き器と、四角ある器とを、入
 れたる水、濁り、水と水は、同しけし
 ても、其器の形に由りて、或、圓く、或
 四角ある形とあり、



人も、小兒の時、此水の如し、善き友と交りて、善
 きことと見聞けば、善き人とあり、又、悪しき友と、
 交りて、悪しきことと見聞けば、悪しき人と



あるを以
 家の内外に、數多の小兒あり
 て、其遊ぶと、各異ありを
 見らるべし、家の内なる小兒は、
 日々學校にて、學びたる所を、
 家に歸りて、其友と、互に問答
 して、ことを樂しむ、此等ハ、他

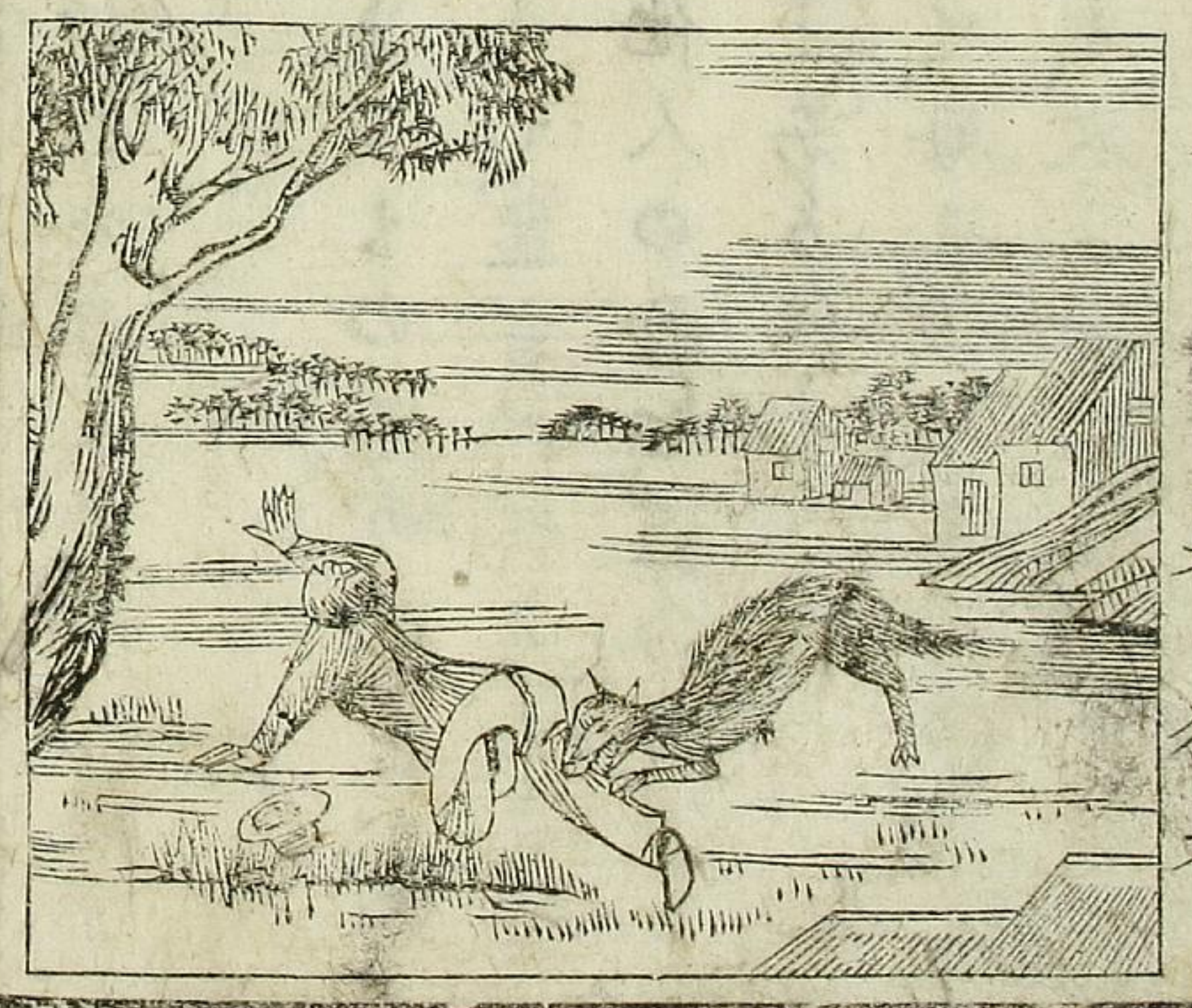
小學讀本
 卷二

三三
 文部省

日、必賢き人と、あふべし、又、外に集まり、遊べり小
兒ハ、學校にも、行らざる者と見え、犬を噛み合
せ、棒を打揮り、無益の遊のこをなせり、此等ハ、後
日、必愚なるものと、あふべし、汝等、賢き人とあふ
んと思ふべし、能く心を用ひて、常に善き友と交り、
必惡しき小兒ハ、遊ぶべし、汝等、事の正しあふざるを、知るときハ、たゞ、他
日、利あることと、思ふとも、決して、行ふべし、又、惡しき業を、假にも、心より、行ふんことを、思ふ
べし、若し、心より、行ふんことを、思ふときは、縦令

事ハ、出さばとも、既に、行ひたるは、同トと知る
べし、
凡て、惡事ハ、虚言より、始まるものあり、さきハ、暫
其身に、利益ありとも、決して、虚言にべし、虚
言を以て、得たる利益ハ、他人の物と、盗みたるは
同トく、終るハ、其身の害とあふべし、
むらト、一人の男兒ありて、毎々、狼来き、狼来き
り、誰り出で、救ひ給へと、大に呼びて、途を走
り、こきハ、真に、狼の来きり、何れハ、他人の出
来りて、救ふんと、さるときは、欺き得たりとて、大

又其人を笑ふと以て、戯とせらるるあり
 斯くせらるること、度々あり一犬ある日、真に、狼来り
 て、此男兜と、食せんとに
 男兜ハ、大に呼びて、狼来
 せり、救ひ給へといへど
 も、誰も亦例の虚言ふる
 べしとて、こせと、救ふも
 のおありしゆゑ、終に、狼
 のため、噛み殺された
 り故に、平生、戯も、虚言



と以て、人と欺くものハ、適、眞實のことと、話をと
 る、信とあはれもの、あはれされば、常々、慎むべきこと
 ありは、
 此處と、何如なる家ありと、
 思ふぞ、○こせハ、書肆あり、
 爰に、三人の男あり、帽を戴
 きたる、二人の者ハ、書籍と、
 買とんがため、此處に、来
 るるなり、一人ハ、既、一冊
 の書と、購ひ得て、去らんと



以一人を、机上の書の價と定め居るあり、
 今此二人の書籍を買ふハ、何の爲ありや、寧ろ歸
 りて、こゝと理會し、己の智識を増さん、と欲れバ
 あり、書おけをバ、智識を増すこと能はん、智識無
 きときハ、國の利益と興にこと能はん、故に志は
 る者ハ、有用の書とバ、金と惜まざらん、とを購
 ぶあり、

此圖の男ハ、手は持てる、書と讀みて、其義と、小兒
 又、語り聞あしむる、所あり、○汝この小兒ハ、能く
 心と用かて、其語と、聞くと思ふ、○此小兒ハ、心



と用いて、其語を聞くと、見之
 く、此男の、語ることに、深く考
 ふる、とまあり、思ふ、と今聞か
 所ハ、此書の中の、尤大切なる
 箇條あるべし、○凡そ、教と人
 と受る者ハ、決して、倦怠の心
 と、生れべし、倦怠の心と、
 生ぞると、まハ、直に、其顔色、見ハ、
 ぶる者ハ、亦こゝと知りて、懇に、教訓
 する者ハ、皆此小兒の如く、心と用

のみ、其話と、能く考ふべきことなり。

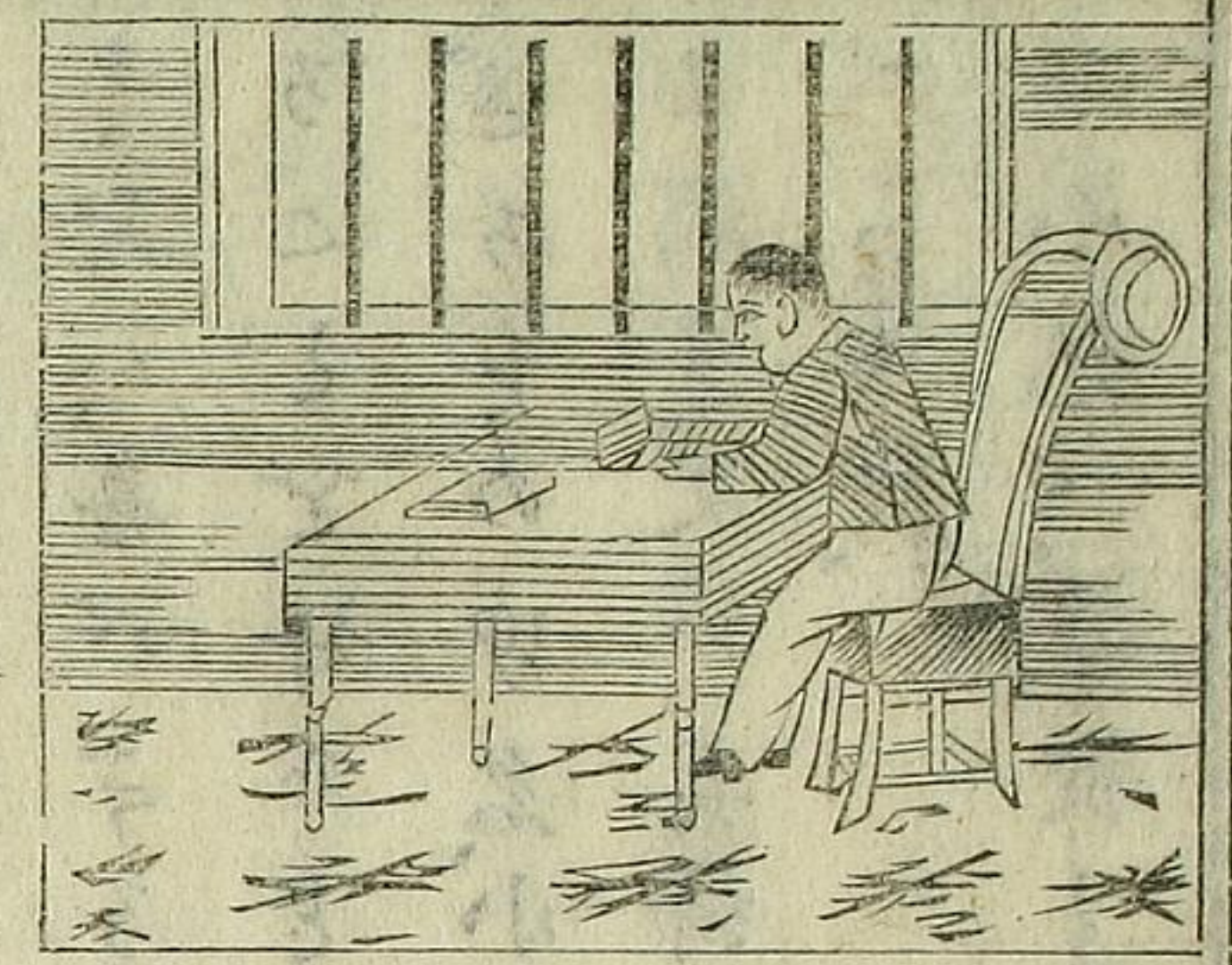
第六

汝ハ、猫の兒と、愛はる久又、犬の兒と、愛はるか○
我ハ、猫又ても、犬もくも、其遊
び戯るゝ所と、見らゝとと好
めり。

總て、獸類も、稚き時ハ、小兒の
如く、遊び戯るゝことと、好む
ものなり、中には、猫の兒ハ、繩
又ハ鞠と弄びて、能く戯も遊ぶ
なり○然れども、



獸類も、年老ゆきバ、遊び戯ることと、好まば、人は
して、年長けたる後まで、遊び戯るゝハ、耻づべき
こととありばや、○さきバ、老たる猫も、其兒の戯
も遊ぶと、見ることと、好むとも、其身に、觸らゝこ
ととハ、喜バざるあり、○老人も、小兒の遊ぶと見
ることと、好めども、其身に、觸らゝこととハ、喜バ
ざるものゆゑ、小兒ハ遊び戯るゝとも、老人の身
は觸るゝ又ハ、其椅子、机ふともハ、決して、手を着く
べからば、
此小兒ハ、學校もく、善き生徒あり、○汝ハ、此小兒



の學校にて、書と讀むと、聞きたりや、○此頃始めて、ことを聞きたり、

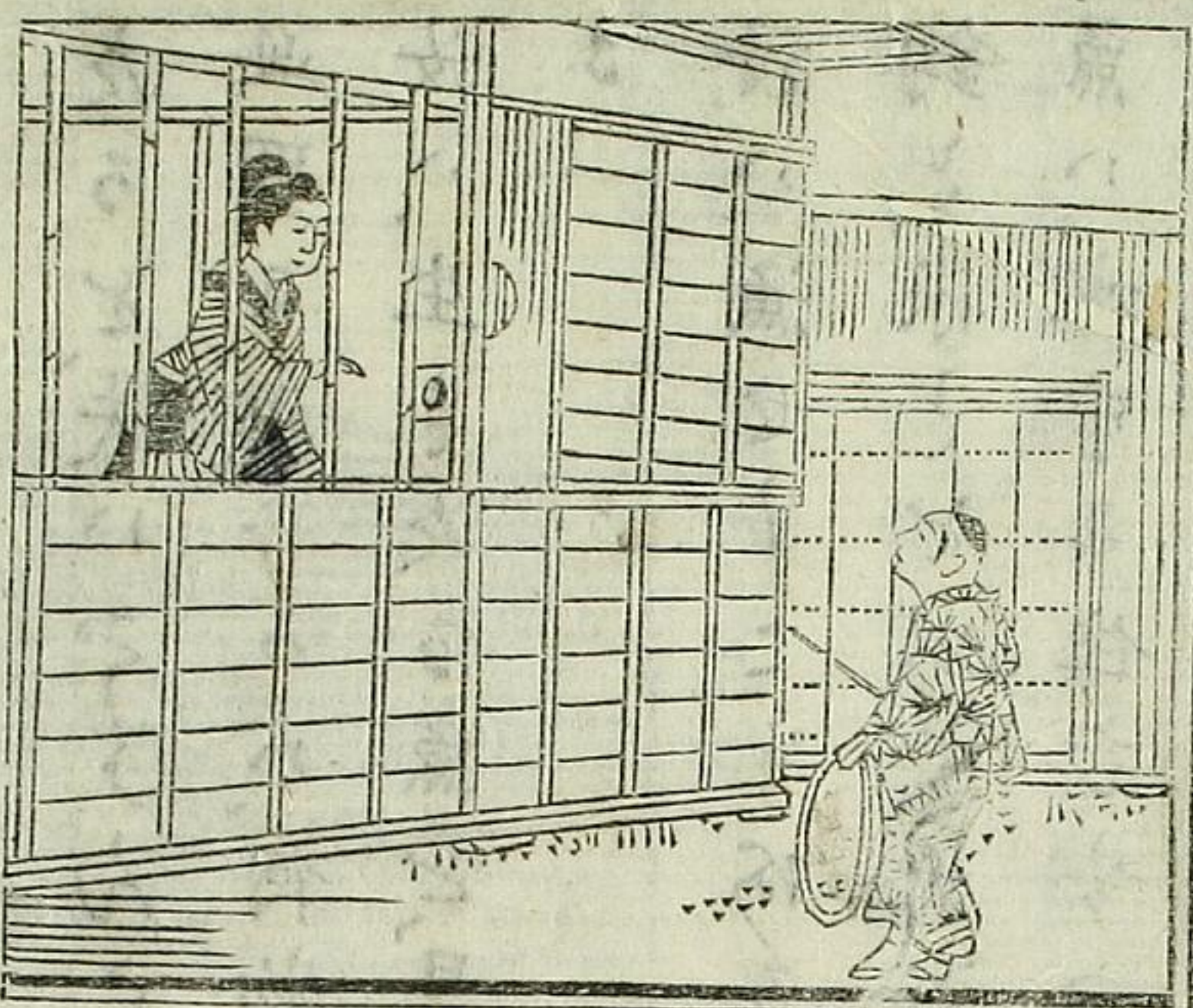
此小兒ハ何の書と、讀めりや、○彼ハ小學讀本と、讀めり、○其讀む所の、小學讀本ハ、何の卷ありや、○彼ハ、卷の三と讀めり、我ハ、この小兒の如く、能く書と讀むものと好む、能く書と讀むものハ、後ハ、善き人と、おそバあり、○若し學問も亦く、智慧も亦くハ、いかてあ、善き人と、おそることを、得べ

き、善き人と、あることを、得ざれば、他人も、愛せざること、おそく、又、貴ばるること、おそく、

爰又、三人の小兒あり、一人ハ、机に向ひて、書と讀み、二人ハ、獨樂と廻ハシテ、遊べり、獨樂と廻ハシテ、跳り旋るゆゑ、又、机を觸れて、其上の、筆筒と倒せり、書と讀む居たり、小兒の心は、此二人の、戯を遊ぶと、何如又、騒



おしく、思ひ居るあらん、定めて、此小兒等の他處
 へ行ふんことを願ふあるべし、
 總て、人の自好まざることを、人亦好まざる
 ものと、思ひ、遊び戯るもの、決して、人の妨と、お
 るべきことを、おぼせ、又、自好むこと、人
 亦好むものと、知りて、これをまう、人は譲るべ
 し、さき、古き教へるも、己の、欲せざる所、人は、
 施及こと、おぼせ、又、己達せんと欲せば、人
 と、達せしめよ、とも云へり、
 爰に、遊歩に出せんと、此小兒等、此小



兒の、善きと、惡しきと、知
 り、や、我ハ、本、其入と、お
 りと、知らば、雖、今遊歩と
 出でんとするに、其母、呼
 び返されて、速に歸り来り、
 否む色、おぼせ、見む、善き
 もの、あるべし、其母、
 呼び返されて、こそ、厭ふ、心の、色、見はる、こ
 必善きもの、あり、
 此小兒ハ、未、學校に入らざるか、○此小兒ハ、五六

歳に過ぎば、見ゆれば、未だ學校に入らざるべし、我ハ此小兒の學校に入りても、遊歩のよし好まば、勉めて、書と讀み、成長の後も、其善き人たると、失はざらんことを、願ふあり、
 此圖は、画けるハ、何物ありや、○こまハ、魚なり、○汝ハ、生きたる魚と、見たるべし、○常ニ、これを見
 汝ハ、漁せしことあり、何ぞ以て漁せしや、○
 釣と、糸とを以て、魚を釣しことあり、
 魚ハ、水中に住むものゆゑ、水を離るるときハ、

其命を保つこと能はば、○魚ハ、鰭と尾ありて、自由ニ、水中で游泳し、又全身は、鱗あり、鱗は、
 きあり、其鱗も、魚よりして、大小を異なせり、



汝ハ、魚の、水中にありるとき、
 も、其目ハ、よく物を見ること、
 思ふあり、○然り、水中にても、
 よく物を見るなり、○何ぞ
 以て、水中にても、能く物と
 見ることと、知るや、○も
 水中にても、物を見ること、

能ハざる時ハ、必岩石ニ、衝キ當リテ、頭ヲ傷クニ
シ、然ラザルモノト、よく物ヲ見ルことト、得ルバ
ナリ、

人ハ水中ニマテ、物ヲ見ルこと、分明ナリ、魚ハ水
中ニマテモ、甚分明ナリ、

是レ魚ノ、水中ニマテ、能ク物ヲ見ルハ、其目、人と同
シ、あり、されバ、あり、

魚ハ、水中ニ住ミ、人ハ、空氣中ニ、住ミ、ゆゑ、人の
空氣中ニマテ、能ク物ヲ見ルハ、魚ノ、水中ニマテ、能ク
物ヲ見ルハ、同じ、

トを得ルとも、文字ヲ知ルヨ、五ニ、書簡ト
贈答シテ、其安否ヲ、審ミ、以ルことト、得ル

ト、此二人、文字ヲ知ラズ、何ニ、因リテ、又音信
ト、通ルことト、得ルべき、

汝等、此二人ノ、事ヲ見テ、能ク文字ヲ習ヒ、勉メテ、
書簡ヲ作ルことト、學ぶべきナリ、

むろ、ある家ニ、兄弟ノ小兒あり、兄ハ、七歳ニ、
テ、弟ハ、五歳ナリ、○兄ハ、其才最敏ニ、心モ、亦
優シキモノあり、弟モ、良キ性質ヲ、有ルモ、尚、幼キ
ヨ、未、世間ノ事ヲ知ラズ、輒モ、其レヲ、過リたる、

舉動をふんことあり、

ある日、兄弟とも、郊外に出で、遊べるに、ある家の籬に、小鳥の巢あり、親鳥ハ、人の来るに驚き



て、飛び去りたり、兄弟ハ、巢の中と、窺ひ見るに、雛三羽あり、弟ハ、悦びて、雛を取りて、持ち、歸らんとし、兄ハ、これと止めて、親鳥の子と愛はるを、父母の我等を、愛し給ふよ、同一、今汝、この雛と、取り去らば、

親鳥の悲、何如ありん、若、我家に入り来りて、我等兄弟と、捕へ去るものあり、父母の悲を、給ふこと、幾、ありん、まし、て、雛と親鳥の、養ひ由りて、生長はるるの、たし、て、今、人の手にあがり、弟ハ、決して、育つことあり、べし、されば、今、この雛と、取らざるこそ、よし、けと、諭し、けと、弟ハ、其理を、服して、兄の教を、随ひたり、此弟の、鳥の雛と、取らんといふに、殺生を、るに、是非を、も、其理を、論ぢ、かくの如し、まし、て、無益は、殺生を、るとや、

されば、縦、小き蟲たりとも、無益と、殺はべらるべし、
 世の理を知らざる者ハ、小き蟲と、殺はと以て、些
 細の事とせり、實ニ、些細の事に、似たりと雖、こゝ
 と、殺さんと、思ふ心は、即、些細の事にあつた、この
 心、既に慈悲を失ひたりあり、慈悲を失ひたり心
 漸、長ざらば、至らば、畜類と、殺はのこゝろあり、
 終、ハ、人を殺はの、大惡とも、陷るべし、豈、恐とさ
 らんけんや、
 故、殺生と、誡むるハ、慈善の人とあるべき、階は
 下々、終、ハ、類とせざる、善人とともなり、身の幸福

48-13815

と、得るに至るべし」

月
 神
 威
 徳
 相
 子
 子
 子

小學讀本卷之二終

明治十二年五月十三日翻刻御届

翻刻人

東京府平民

山中市兵衛

芝區三嶋町十番地

010190528974

